

まじかる☆ないと

第 6 部:最終決戦編

第 38 章:奇跡の魔法

タカ in アイリーン:「リバースを唱えてこの人のときを戻す！」

アイリーン in タカ:「気持ちはわかるけど…リバースを使えば魔法力を大幅に消費するわ…」

オリビア in イル:「…この後のバトルにも少なからず影響しますね。」

タカ in アイリーン:「わかっています！でも俺はそれでもこの人を助けたい！偉大なるときの神クロノスよ。この者の時間を 3 分戻し健全なる肉体へ戻し給え！リバース！」

俺はリバースの魔法を唱えた。ナターシャの傷がみるみるうちにふさがり、肉体の血色が戻る。ナターシャは意識を取り戻したが、またしても短剣を手に持ち同じことを繰り返そうとしていた！そのとき、何かがナターシャのカラダに乗り移った…

スルト in ナターシャ:「安心しろ…俺はスルトだ。お前たちと争うつもりはない。ナターシャは俺が必ず説得する。」

タカ in アイリーン:「信じていいのか…？」

スルト in ナターシャ:「もちろんだ。ナターシャがお前たちを恨む限り俺は安らかに眠れないと言えはわかってもらえるだろう…」

アイリーン in タカ:「彼女の気持ちにも寄り添ってあげてね！」

スルト in ナターシャ:「ああ、お前たちには感謝している。俺も一緒に行きたいところだが、ナターシャのカラダをこれ以上傷つけない…」

俺たちはスルト in ナターシャをその場に残し先に進んだ。

スルト in ナターシャ:「頼んだぞ…」

俺たちはオリビア姉さまの案内で玉座にたどり着いた。そしてそこで変わり果てた魔王うじゃ in エレナの姿を発見する…

オリビア in イル:「魔王さま…しっかりして！ダメだわ…やはりこういうことだったのですね…」

オリビア in イルは玉座に目を向け、そこに座る者を睨みつけた。

アイリーン in タカ:「どういうこと？オリビア。」

オリビア in イル:「あたしを倒したのは魔王さまの姿をした何者かでした！そして魔王さまはエレナに乗り移ったまま。」

タカ in アイリーン:「どうしてエレナの中身がうじゃだとわかるんですか？」

オリビア in イル:「普通の女の子なら絶対にしないセンスのないコーデをしているからです！」

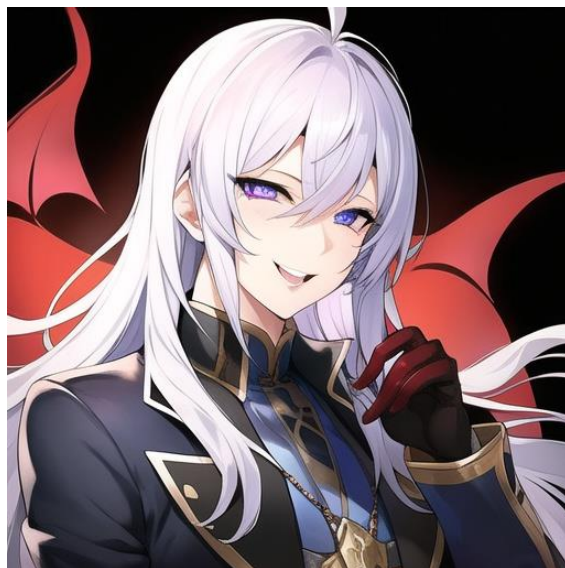
アイリーン in タカ:「そう言えば…イニシオ高原に襲来したときもメイドの衣装だったわね…」

オリビア in イル:「そこに座っている魔王さまの姿をあなたは魔王さまではないということ！

正体を現しなさい！」

??：「オリビア？そう…さっき倒したと思っていたのに…男に乗り移ってここまで来たって訳ね。でもそんな男のカラダでは何もできないでしょうけど。」

玉座に座っていた魔王の姿をした者はゆっくりと立ち上がり、魔法を詠唱した。



第 39 章: 希望の光

??：「ルナ！」

ゆっくりとその魔法が俺たちに向かってくる。威力もなさそうだし、これなら相殺できる。

オリビア in イル：「二人とも避けて！その魔法に触れてはダメ！」

俺たちは??の放ったルナを避けた。城の天井と内壁がガラガラと崩れ落ちる。

??：「触れただけで防御力関係なくダメージを与える闇魔法なのに…ルナの本質を見抜くとは…なかなかセンスがあるね。さすが三銃士といったところかしら。」

タカ in アイリーン：「あいつが最後の三銃士ルシアなのか？」

オリビア in イル：「いえ…ルナは上位の闇魔法…ルシアが使えるとは思いませんが…」

アイリーン in タカ：「魔王さまの肉体に憑依したことで闇魔法を使えるようになったのかも…」

オリビア in イル：「ルシアは忠誠心溢れる三銃士と言われています。魔王さまを裏切ってそのカラダを乗っ取るとは思えません。」

??：「アイリーン…あなたも邪魔な存在…消えて！」

??は次の魔法を俺に向けて放った。この魔法は…まさか…

その瞬間、一閃の光が??の放った魔法の軌道を変える。光を発した方向に目を向けると…見たことがない人物がいた。

ルシア：「私はルシア。魔王さまを守る三銃士の一人。」

タカ in アイリーン:「ルシア。三銃士のお前がどうして俺を助けた？」

ルシア:「勘違いをするな。私は魔王さまを助けに来たのだ。」

アイリーン in タカ:「ルシア…うじゃはまだ生きているの？」

ルシア:「心臓が停止してかなり時間が経過している…」

オリビア in イル:「ルシア、無事だったのですね。オリビアです。」

ルシア:「いや…私も無事ではないのだ…先ほど魔王さまの姿をしたあの者に不覚を取った…」

オリビア in イル:「あなたほどの者が…」

ルシア:「偽物だとわかっていても攻撃できなかった…今はこの土人形のカラダに魂を移し何

とか生きながらえているが長くは持たない。戦闘は難しいが、私にもまだできることはある！

アイリーンと…タカ、あの者の攻撃をしばらく凌いでくれ。私はその間に準備を整える。」

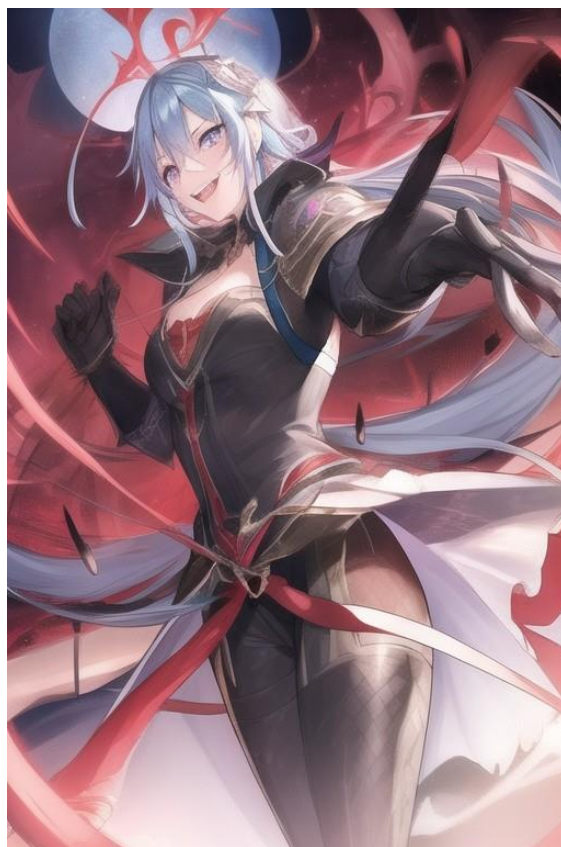
オリビア in イル:「！まさか…あの者にサクリフィースオを使うつもりではないですよね？」

ルシア:「安心しろ…魔王さまの肉体を傷つけることはしない。」

??:「何を企んでいるかわからないけど、あなたたちを倒せばすべて終わる！チャーム！」

??は俺に向かってチャームを放った。

??:「さあ、タカ。そんな女のことを忘れて、あたしのモノになりなさい！」



タカ in アイリーン:「俺は聖魔女となったのだ。俺に誘惑は無効だ！アイリーン行くぞ！」

アイリーン in タカ:「ええ、タカ！エメラルドブレイド！」

第 40 章:光を継ぐものたち

アイリーンのエメラルドブレイドが??を捕えたかに見えたが共に剣の軌跡が空を切る。

??:「こちらもあなたたちの技は対策済よ。」

タカ in アイリーン:「止められるのは想定していた。アイリーン！」

アイリーン in タカ:「タカ！トルネードディザスタ！」

2人の合体技が??を襲う。その衝撃に??は吹き飛ばされた。

ルシア:「サクリヴァイブを使ってうじゃさまを蘇生させる。」

オリビア in イル:「それは自らの命を犠牲にして相手を蘇生させる魔法…それを使えば魔王さまは蘇りますが、あなたは…」

ルシア:「準備できた…アイリーンとタカ、オリビア、うじゃさまを頼むぞ！サクリヴァイブ！！」

??とアイリーンたちの熾烈なバトルが続く中、温かい光がルシアとエレナ in うじゃ、そして俺を包む。そしてその光はリバースで大幅に失った俺の魔法力を全回復させた。

ルシア:「うじゃさま…一瞬でも一秒でも長く生きてください…あとは頼む…タカよ…」

ルシアはそう言い残すと天に召されていった…

タカ in アイリーン:「ルシア…お前の想いは受け取った…この戦いは必ず終わらせる！」

??:「自分を犠牲にしてうじゃを復活させるなんて…」



うジャ in エレナが息を吹き返し立ち上がる。

うジャ in エレナ:「理解できないお前ではないだろう。もう止めにするのだ…エレナ…」

タカ in アイリーン:「信じたくはなかったがやはりそうなのか。」

アイリーン in タカ:「エレナがどうして魔王さまのカラダに?魔王さまに乗り移られていたんじゃないの??」

エレナ in うジャ:「うジャはあたしのカラダを奪ったときにタカ、あなたと結ばせてやると言ったわ。でもいつまでたってもそれは叶うことがなかった。」

うジャ in エレナ:「エレナのカラダに乗り移った翌日、タカが元のカラダに戻るのを見計らって、タカとアイリーンを引き離せば、タカとエレナは結ばれ、エレナは俺に協力してくれると思った。だがタカとアイリーンが愛し合っているのを見て、俺は 2 人の仲を引き裂くことはできず引かざるを得なかった。」

エレナ in うジャ:「うジャがあたしに乗り移って 3 箇月くらいした頃、あたしは絶望して魂が自分のカラダから離れて浮遊してしまった。そんなとき、あたしはこの城でうジャのカラダを見つけた。そして思ったの。あたしがうジャのカラダに乗り移ればいいんじゃないかってね。」

アイリーン in タカ:「魔王さまがそこまでしてエレナのカラダを手に入れてしたかったのは何なの?」

第 41 章:魔王の目的

うジャ in エレナ:「俺の肉体には邪気が潜んでいた。目的を達成するまでは、それから逃れ、ときを待つ必要があったのだ。そして魔族に足りない“火のエレメント”を持つエレナの協力を得ることができれば、邪気を払うことができるはずだったのだ。」

オリビア in イル:「魔王さまは人間との共生を望んでいましたから、自らがそれを破壊する存在となることを避けていたのです。そしてようやくチャンスが来たのです。」

エレナ in うジャ:「でもあたしの協力を得る前にあたしとそのカラダを離れたせいで、あてが外れたという訳ね。そのお陰であたしは、うジャ、あなたの肉体を手に入れることができた…」

オリビア in イル:「土と闇のエレメントを持つスルトさんが敗死してしまったせいで更に計画は崩れましたが、代わりに水と土のエレメントを持つタカ君と風と火のエレメントを持つアイリーンの協力を得れば再び邪気を討つことができる状況となったのです。」

タカ in アイリーン:「それで俺たちの修行をしてくれたということですね。」

オリビア in イル:「ええ。邪気を討つためには高威力の六属性の力が必要です。」

うジャ in エレナ:「エレナ。そのカラダにはまだ邪気が残っている…お前が俺のカラダに居続ける限り、その邪気はお前の精神に影響し、お前は邪悪なものになってしまう…早くそのカラダから出て元のこのカラダに戻ってくれ!!」

エレナ in うジャ:「うジャ。何を言っているの？あたしは元のカラダになんて戻らない！」

タカ in アイリーン:「エレナ？どうして？」

エレナ in うジャ:「元のカラダに戻ってどうするというの？倒すべき敵ももういない。望んでいる恋愛もできない。それどころかルシアたちを死に追いやったあたしは、魔族からも恨まれるんだよ。それならあたしはこのうジャのカラダのままがいい！そしてあたしを脅かすあなたたちが存在する限り目障りなの！」

エレナ in うジャは究極魔法アルテマを放った。

タカ in アイリーン:「大丈夫だ。対策は考えてある。アイリーン！」

アイリーン in タカ:「ええ！」

俺はトルネードとアースクェイクを、アイリーンはエラプションとブリザードを発動する。四色の光が空中で混ざり合い、アルテマと衝突するとまばゆい輝きを放ち互いに消滅した。

エレナ in うジャ:「そう…四元素を究極まで高めてアルテマの威力を打ち消したって訳ね…ではこれはどう？」



第 42 章:止められない暴走

エレナ in うジャはメテオを素早く詠唱した。上空に無数の流星が出現し、俺たちに降り注

ぐ！

タカ in アイリーン:「勇猛なる巨人よ。俺たちを守り給え！タイタン！」

俺はタイタンを召喚し、メテオの脅威からみんなを完全に守った。

エレナ in うじゃ:「タカ…どうしてあたしの邪魔をして魔族の味方をするの？」

タカ in アイリーン:「俺はエレナの気持ちを考えずに行動してしまい傷つけてしまった。すまなかった。」

アイリーン in タカ:「エレナ、あたしもあなたのカラダを強引に奪ってしまった。あんなことをしなければあなたはこんなことをしなかったはず…でもあなたに乗り移っていたとき、とても優しい気持ちに包まれた。あんな気持ちにならなかったら、あたしは永遠にあなたのカラダに乗り移っていたかもしれない。」

タカ in アイリーン:「エレナは本当はこんなことをしたい訳ではないはずだ。人間の世界に戻りたくないなら俺たちと一緒にここで暮らそう。俺も既に人間ではない。魔女に生まれ変わっている。」

エレナ in うじゃ:「そんなこと！愛し合うあなたたちをあたしに見せつけながら、あたしに暮らせと言うの？」

うじゃ in エレナ:「エレナ…俺と一緒に暮らさないか？すまなかった…すべては俺のせいだ。」

エレナ in うじゃ:「あたしに同情しているの？あなたを一度倒したあたしをあなたが愛せるはずがないでしょ！」

うじゃ in エレナ:「俺は目的を達成するためにエレナのカラダを奪った。でもエレナの肉体を得てエレナとして生活しているうちに俺はお前の素晴らしさを知った。肉体に残る穢れない気質、気高い美しさ、優しさに包まれ…俺は幸せだった…自分の理想など忘れてこのままエレナとして一生過ごしたいと思ったこともある。それと同時にエレナが抱える不安や苦悩も俺の心に重くのしかかっていた。俺はエレナの気持ちが良くわかる。半年以上もエレナだったから！」



エレナ in うジャ:「今更そんなことを言われてももう遅いの…あたしは穢れてしまった…あたしの居場所はどこにもない…あたしはあなたたちを全滅させないとこの気持ちは収まらない…」

うジャ in エレナ:「まずい…邪気の浸食が思ったより進行している…」

タカ in アイリーン:「俺のストップで動きを止めてもエレナの気持ちが変わらなければ解決しないな…オリビア姉さまは危険なので離れていてください！」

第 43 章:闇の源

オリビア in イル:「ええ…魔王さま、アイリーン、タカ、死なないでくださいね。」

アイリーン in タカ:「タカのテイク・ソウルとインサート・ソウルが使えるといいんだけど…」

タカ in アイリーン:「ああ…格上の相手には使えないからな…」

アイリーン in タカ:「エレナを倒すしかないの…」

俺たちは呆然とする。

うジャ in エレナ:「方法はある。アイリーン。お前のギガブレードでエレナの、俺のカラダの心臓を突くのだ！そこに邪気が集まっている。それを払えばエレナは正気に戻る。そしてタカとアイリーン、俺とエレナで六属性の魔法を結集し邪気を討つのだ。」

アイリーン in タカ:「心臓…その一点を突けばカラダへのダメージは最小限ってことね。でも少しでも狙いがずれれば…それにエレナの考えが変わらなければ…」

タカ in アイリーン:「アイリーン、俺がサポートする。その方法に掛けてみよう！」

エレナ in うジャ:「倒される覚悟は決まったかしら?!」

タカ in アイリーン:「グラビティ！」

俺はエレナ in うジャの周囲の重力を変化させ、エレナ in うジャに負荷を掛けた。

エレナ in うジャ:「…カラダが重い…」

タカ in アイリーン:「ストップ！」

俺はエレナ in うジャの動きを完全に止めた。

エレナ in うジャ:(ストップの魔法はせいぜい数秒しか効かない。魔法が解けたらアルテマで…)

タカ in アイリーン:「サイレンス！」

俺はエレナ in うジャの魔法を封じた。

エレナ in うジャ:(魔法を封じても今のあたしにはこのうジャの強靱なカラダがある。ストップの効果が切れたら格闘戦で決着をつけるわ。)

タカ in アイリーン:「アクセレート！」

俺はアイリーンに魔法を掛けてその動きを加速させた。

エレナ in うジャ:「速い！防御が間に合わない…」

アイリーン in タカ:「それだけあれば十分よ！ギガブレード・インパルス！」

アイリーンのエクスカリバーの衝撃がエレナ in うジャの心臓の位置を正確に突く。

エレナ in うジャ:「うっ…」

エレナ in うジャの心臓の鼓動が一瞬止まり、エレナ in うジャはその場に倒れる…エレナ in うジャの肉体から霧のようなものが抜けて行った。

うジャ in エレナ:「あれが俺のカラダに棲みついた邪気だ。魔族、人関係なく魔力を増大させるが、負の心も増大させてしまう…協力してあれを消し去るのだ！」

第44章:集う力

アイリーン in タカ:「あたしのすべてを送るわ！受け取って！エラプション！…ブリザード！」

タカ in アイリーン:「よし！あとは俺に任せろ！アースクェイク！……トルネード！」

無の霧:(四大元素の集合体ではせいぜいアルテマを相殺する程度。無の集合体である私を倒すことはできない。)

うジャ in エレナ:「俺の全魔力もお前に送る。頼むぞ！ホーリー！エレナからも闇魔法を頼む！」

エレナは魔法の発動を躊躇している…

アイリーン in タカ:「エレナ！お願い！あなたの力が必要なの！！」

タカ in アイリーン:「エレナ！お前にしかできないんだ。頼む！」

うジャ in エレナ:「エレナ！お前なら俺のカラダの全魔法を使いこなせるはずだ！カオスを！」

エレナ in うジャ:「わかった…カオス！うジャ、あなたのカラダの全魔力を使わせてもらうよ！」



火、水、土、風、聖、そして闇…すべてのエレメントがタカの元に集い、新たな力が生まれた！

タカ in アイリーン:「みんなの力であの霧を打ち払う！ビッグバン！」



その強大な魔法は一直線に霧の中央に向かうと、そこで爆発し霧は跡形もなく消滅した。

無の霧：(全属性を一度に放出するとは見事だ…だが邪気はいつの時代にも誰の心にもある。魔族にも人間にもその心が増幅したとき、私はまた蘇るだろう…)

エレナ in うじゃ：「あたしは…」

アイリーン in タカ：「元のエレナに戻ったようね。」

タカ in アイリーン：「お帰り、エレナ。」

エレナ in うじゃ：「ごめん…じゃすまないんだけど…あたし…」

タカ in アイリーン：「いいんだ、エレナ。やり直そう！俺たちと一緒に暮らさなくても…お前が望む生活ができるように俺たちがサポートするから。」

アイリーン in タカ：「まずは元のカラダに戻らないとね(笑)」

エレナ in うじゃ：「あたし…このままだいい…うじゃが認めてくれたらだけ…」

タカ in アイリーン：「え…まさかまだ邪気が??」

エレナ in うじゃは首を横に振る。

エレナ in うじゃ:「うじゃ、あたしと一緒に暮らしたいって言っていたわよね？カラダが入れ替わったままでもその気持ちは変わらない？」

うじゃ in エレナ:「え？…あ…ああ…」

エレナ in うじゃ:「何？あたしのカラダに不満があるっていうの？」

うじゃ in エレナ:「いや…その…エレナのカラダに不満はない…俺がエレナで、エレナが俺でいいのか？俺はエレナのように振舞えないが…」

終章:As you like

エレナ in うじゃ:「そこは気にしないで！うじゃはあたしのカラダで自由に振舞っていいよ。あたしがちゃんと傍でサポートするから。それとあたしのカラダの良さをもっと教えてあげる。それを感じたら、うじゃ、あなたは元のこのカラダに戻りたくなくなるよ。」

アイリーン in タカ:「エレナも魔王さまのそのカラダの、男の快感を知ったら病みつきになっちゃうわよ♡」

タカ in アイリーン:「うじゃ、エレナの清廉なイメージを壊すような品のない行動は慎めよ。」

うじゃ in エレナ:(……どの口が言っているのか…)

エレナ in うじゃ:「え？そんなにいいの？このうじゃのカラダ。今から楽しみだわ♡」

うじゃ in エレナ:「これでは聖女ではなく、性女だな…」

エレナ in うじゃ:「あら？そんなこと言っているの？うじゃ、あなたが今その性女なのよ♡」

こうして俺たちの旅は終わった。戦が終わる魔法を必要としなくなると、魔女も生気を必要としなくなった。スルトはナターシャの説得に成功すると、ナターシャの肉体から脱し消滅した。ナターシャはスルトとの想いを胸に戦で亡くなった者の家族に寄り添うように余生を過ごした。オリビアはイルと結婚し魔族と人間の共生の先駆けとなった。ソフィアは魔女の里でクララを弔い穏やかに暮らしている。

俺とアイリーン、エレナとうじゃはそれぞれ結婚して首都エトワールの郊外で静かに暮らしている。アイリーンは元王宮騎士団の俺の肉体の立場を活かして、魔女と人間が共に歩めるよう交流の場をセッティングしている。今では魔女との恋に落ち、結婚し共に生活している者もいる。俺は戦いからは身を引き、今は妻として夫アイリーンの活動を支えている。

エレナとなったうじゃは魔法師団を引退し、魔族と共生できるよう国の内外と交渉している。絶大な信頼があるエレナの紹介のもと、うじゃとなったエレナもうじゃに付き添っていた。最初は異質な存在としてうじゃの姿のエレナを恐れていたが、エレナの持ち前の献身さで周囲の信頼を得て成果を挙げていった。数年後、魔女と同じように他の魔族と人間の間でカップルが誕

生し、結婚することも珍しくなくなった。うじゃは家ではエレナの尻に敷かれながらもエレナとしての生活に満足しているようだ。

やがて俺とうじゃは子を授かった。俺も苦勞して覚えた魔法を使う機会がなくなった。でもそんなことはどうでもいい。俺はその子とアイリーンの笑顔を見ると、幸せな気持ちになる。それが今、俺たちにとっても最も大切なことなのだ。





切り札の魔法リバースをナターシャのために使用するというのはなかなかできない決断か
と思います。一瞬だけ復活したスルトも大切な役割を果たしてくれました。三銃士ルシアも魔
王うジャの肉体に宿る者に敗れていて、うジャの復活とタカの魔力を回復させ貢献しました。
第 6 章は種族関係なく協力していましたね。

うジャの肉体は邪気に蝕まれ、これ以上の浸食を避けるため、オリビアのテイク・ソールで肉
体を脱出し、エレナへ憑依しエレナを洗脳するところまでは計画通りだったようです。タ
カとアイリーンが仲良くなるというところから徐々に計画が狂い、スルトの敗死、エレナのう
ジャへの憑依、そしてうジャとなったエレナのうジャと三銃士への攻撃が誤算となりました。

種族が違えば対立関係がわかり易いですが、人間も国や人種などを超えて仲良く共生した
いものです。